〝ありのままの魅力〟で人を惹きつける

人材

人財採用・定着のリアル



写真左から宮本さん、古川さん、江藤さん

令和7年度の“福祉のお仕事”就職フェアin Osaka(以下、就職フェア)で、ブースが大盛況だった社会福祉法人平成福祉会。

就職フェアでの面談者数や採用者数を増やすノウハウ、社会福祉連携推進法人について、平成福祉会理事の古川華代(ふるかわはなよ)さん、広報担当の江藤未樹(えとうみき)さん、宮本桃(みやもともも)さんにお話をうかがいました。また、仕事のやりがいなどを支援相談員の竹地果菜(たけちかな)さん(入職8年目)にお聞きしました。

広報担当に聞く「魅力の伝え方」

フェアで面談者数を増やすコツは、「第一印象で関心を高める」ことだと思います。年間休日118日、駅近、事業所は大阪市内のみといった法人の特徴をどのように伝えるかが大切です。ブースの装飾を統一したり、働くイメージがしやすいように職員や施設内の写真を多数集めてパンフレットを作成したりしました。

また、広報・営業・通訳・研修についての専門の職員が在籍していることも特徴の一つです。就職フェアに関しても、広報担当がいることで時間をかけて準備ができます。

採用にはSNS(X、Instagram、TikTok)での発信も欠かせません。SNSでは、「誇張せず、ありのままを伝えること」を意識しており、介護の大変さも知ってもらうことで、その先にある喜びや達成感、仕事のすばらしさが鮮明に伝わると考えています。実際、SNSの動画をきっかけに志望して来られた例も複数あります。人材不足が慢性化する業界ですが、現在は人員がプラスになるほど安定して採用ができています。

社会福祉連携推進法人のメリット

令和7年に「社会福祉連携推進法人ROOT」が立ちあがりました。加盟している法人同士が連携し、職員の採用や定着に向けたノウハウの共有、合同研修、人材交流、相互応援などを通じて、人材確保や育成、安定した施設運営を支えあうしくみです。平成福祉会は、〝入居希望を断らない〟をモットーとしており、昨年度はグループ法人全体で98・7%という稼働率の高さを維持しています。一方でこれ以上受け入れができない状態で入居希望が入る時には、スムーズに他の加盟法人につなぐことができるのもメリットです。

働き方の希望を叶えて

―入職8年目の竹地さん(写真中央)。4年間介護を経験し、現在は相談員4年目を迎えます。―



就職活動では〝介護職から相談員にステップアップができること〟を軸にしていて、希望が叶う平成福祉会に決めました。

相談員の仕事は、入所相談から面接・契約を主に担います。介護保険制度の勉強など、直接介助とは違った大変さもあります。でも、入院時に真っ先に自分のことを思い出して頼ってくださったりと、やりがいを感じられる仕事です。

また、通常の職員配置基準よりもプラス1名の体制が取られていることや、それぞれの分野に専門職がいることで、安心して業務に専念できています。

令和7年度 就職フェアのようす

就職活動のリアルについて若手職員に気軽に質問できる「先輩相談コーナー」が設けられており、竹地さんも先輩として参加いただきました。令和8年度は2027年3月13日OMMにて開催予定です!



ズームアップ ZOOM UP!

笑顔 咲かせる人 vol.42

福祉の職場で働く人を紹介し、仕事や人の魅力を伝えます。
今回登場するのは、入職9年目の吉高さん。やりがいや今後の抱負について聞きました。

❋サービスの外にいる人に会いに行く

大学を卒業後、医療福祉、高齢者福祉分野で勤務していた中で、施設や病院で関わる利用者は福祉サービスにつながっているが、サービスにつながっていない人はどうしているのだろうと思い、社協への転職を決めました。

現在はCSW、団体事務、生活支援コーディネーター、地区担当、貸付など、さまざまな業務を担当しています。

社協での多岐にわたる業務にあたることにより、前職では関わることのできなかった住民の方々や、その方々を支える地域の人たちと関わる中で、さまざまな人や地域とのつながりが生まれていくことに、この仕事の面白さを感じています。

❋人をつないで、地域をかき混ぜる

自覚はありませんでしたが、人と接するのが好きらしく、人と人とのつながりづくりが楽しいと感じています。例えば、生活支援体制整備事業で協議体を進める中で、既存の地域福祉関係者だけではなく、農家、住職、商店など、福祉の枠を越えたさまざまな人や団体を巻き込んでいます。

入口は福祉でなくても、どこかで福祉につながっています。一人ひとりの「やりたいこと」に寄り添いながら、福祉と福祉の枠を超えたさまざまな人たちをかき混ぜることが自分の役割だと思っています。

❋初心を忘れず、一人ひとりの声を聞く

太子町の地域福祉を今より少しでも良くしていくことをめざしています。

仕事を行う上で心がけているのは、自分の経験や考えを優先するのではなく、初心を忘れず目の前の人が何を求めているのかにしっかりと着目することです。それを常に大切にすることで、地域にいろいろな下地をつくっていけると考えています。



社会福祉法人 太子町社会福祉協議会 吉高(よしたか) 賢司(けんじ)さん

ふくしを巡る No.27

歴史探訪

文字の未来をひらいた、モリサワの歩み

UD(ユニバーサルデザイン)フォントは、より多くの人にとって「わかりやすく」「読みやすく」「読み間違えにくい」ことをめざして開発された書体じゃ。学校教材や自治体の広報物、駅の案内などさまざまな場で活用されており、ふくしおおさかもUDフォントを採用しておるぞい。

今回は、UDフォントをはじめ、情報の伝達手段として欠かせない社会のインフラである〝文字〟のあり方をつくり続けてきた、株式会社モリサワを紹介するぞい。

モリサワの歴史は、創業者・森澤(もりさわ) 信夫(のぶお)が大正13(1924)年に考案した「邦文写真植字機」にはじまるぞい。当時主流だったのは活字を一つひとつ用意する活版印刷。それに対し、写真の原理を使って文字を印画紙に焼き付ける写真植字は、文字の大きさや配置を柔軟に変えられる画期的な技術だったんじゃ。

昭和23(1948)年には大阪で写真植字機製作株式会社(現 株式会社モリサワ)を設立。印刷・出版のデジタル化にあわせてデジタルフォントへと事業を広げ、現在は3500書体を超える「Morisawa Fonts」を展開しているぞ。100年以上に渡り、常に文字の可能性を追い続けながら、さまざまな場面で使われる書体を届けているのじゃ。

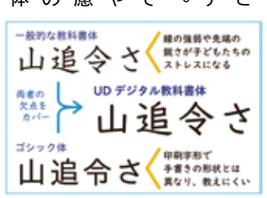
写真提供:モリサワ


森澤信夫が1929年に完成させた「実用写真植字機第1号機」

「読みやすい」だけで終わらない

UDフォント開発の過程でモリサワが大切にしたのは、実際に文字を使う人の声を聞くこと。特別支援学校や拡大教科書の制作現場などを訪ねる中で、文字の「はね」や「はらい」が気になる、線の細い部分が見えにくいなど、読み書きの困難さは一人ひとり異なることを知ったのじゃ。

「世の中には多くの書体があるのに、文字を学ぶために必要な教科書体がない」と考え、当事者の声をもとに開発されたのが「UDデジタル教科書体」。読みやすさだけでなく書きやすさや筆の運びにも配慮し、子どもたちの学びを支える書体となっているぞい。



文字の力で、これからの社会へ

「文字を通じて社会に貢献する」という社是のもと、読みやすくわかりやすい書体の開発に取り組んできたモリサワ。

これからも、読みやすさやわかりやすさを追求するとともに、多様な表現を支える書体やサービスを提供してくれることに期待が高まるぞい。

この広報紙の作成には共同募金配分金を活用させていただいています